

歴史は未来の羅針盤



近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」は、当面の間は入館料を無料としています。開館時間は午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日(祝日・休日の場合はその翌日)、祝日の翌日、年末年始等になります。ぜひともご来館下さい。『近江日野の歴史』全九巻は「旧山中正吉邸」、教育委員会事務局や各公民館にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。ぜひお買い求めください。

旧山中正吉家住宅
町の有形文化財に指定

旧山中正吉家は、山中兵右衛門家(現在の近江日野商人館)の分家で、富士宮(静岡県富士宮市)で酒造業を営んだ商人です。

その本宅として江戸時代の後期に、馬見岡綿向神社の参道沿いに建てられたのが旧山中正吉家の主屋でした。この場所は西大路藩の武家屋敷街の西端にあたり、宅地は藩主の市橋氏から拝領したと伝えられます。

その歴史的な価値や意匠的な面が評価され、平成二十七年三月三十一日に「旧山中正吉家住宅」として、敷地を含む十四件(十五棟)が、日野町の有形文化財に指定されました。

今回は建物のデザイン面に注目して見所をご紹介します。

和と洋の織り成す空間

主屋は、この地方の農家の造りにならっていて、重厚な金庫が残る「机場」や、仏壇が置かれた「ぶつま」などに分かれています。各部屋には色あざやかな小鳥や草木の日本画が描かれた天袋や蝙蝠をモチーフとした釘隠など、デザイン面での大小様々な見所があります。蝙蝠の釘隠は、主屋の南側に建ち、



▲蝙蝠をモチーフとした釘隠

おもてなしの場所として使われた座敷棟でも使われており、しかもそれぞれが微妙に姿や表情が違うというこだわりです。蝙蝠の金具と言えど不思議に思われるかもしれませんが、蝙蝠は古来より長寿や富、子孫繁栄などの象徴として使われることが多い凶柄で、ここでもこうした思いから使われたと考えられます。

さて、主屋は昭和十三(一九三八)年頃に改装されますが、この頃、北側に広い庭園を持つ新座敷棟や洋間棟、浴室棟などが建てられます。

新座敷棟は主に三部屋の和室で出来ていて、建具に人物や小鳥などの日本画が描かれています。主屋や座敷棟と異なり、引き戸に植物の浮き彫りが入ったガラスが使われるなど、洋風のデザインが各所に取り入れられています。

また、洋間棟の窓にはステンドガラスが使われており、外壁はドイツ壁と言われる洋風の仕上げとなっています。

さらに、浴室棟にはレトロなシャワーや、小鳥や椿をあしらったステンドガラスなど洋風の仕上げを施しながらも、各建物の屋根は瓦葺きとなっていて、昭和初期の洋風のデザインを取り入れた建物の特徴がよく残されています。是非一度お越しいただき、建物そのもののもつ魅力を感じてみてください。



▲浴室のステンドガラス